



## 大学教員が学会にできること

阿部 治\*

この業界にかかわってから35年が過ぎた。最初は国際ハイブリッドマイクロエレクトロニクス協会日本本部から。第1回のIMCで、右も左もわからない若造にもかかわらず発表させていただいたのが思い出される。そして、現在は一般社団法人エレクトロニクス実装学会。これまでに多くのかたがたにお世話になりました。定年が近くなって忙しくなくなってきたら、学会のために何かできることをして、恩返ししたいなあずっと考えていた。

自分はずっと大学に勤務しているのであるが、JIEPでは、学会員のうちの大学教員はおおよそ1割。しかも、会社から引き抜かれたかたが多く、大学で純粹培養された会員はほんのわずかである。基礎となる原理や理論の重要性よりも、経験値とノーハウが求められる実装というジャンルを取り扱う学会であるから、このような昔から続いている会員構成の傾向を改善することは難しそうである。

この35年の間に大学での業務もずいぶんと変化してきた。大学教員に求められる教育・研究・学校運営という柱は変わらないのだが、年を取るにつれ、教育への比重が大きくなり、また、研究（自分で実験すること）よりもマネジメントにかかわる時間が長くなってきた。会議は多いし、志願者を集めるために高校訪問やオープンキャンパスなどの営業活動もたくさん。授業を休講にして出かけるなんてよほどの理由のあるときにしかできないのが実情である。

自分が所属している学部には、いくつもの学科があり、さまざまな研究をしている教員が在籍しているわけだが、近年、若い教員の間で異分野交流が盛んになってきている。別の学会に所属している、エレクトロニクス実装と全く関係のない分野と思われる人から問合わせがあったりして、異分野の研究が交流することにより、エレクトロニクス実装の応用分野の広がりが予見されている。

本学会の理念に『産学官の広い連携の輪を醸成することによって技術・理論の深耕と融合を促進し新しい価値の創造に結実させる』とあるが、連携を拡大し、分野の全く異なる学会レベルでの技術交流ができないものだろうか。例えば所管の省庁は違うが、土木学会や日本建築学会とのコラボなどというのはとても素敵である。現実的には、これらの学会は巨大すぎるので研究会レベルから始めるのもいいかもしれない。会社では隣の部署でどのような技術を持っているかわからないという話をよく聞く。自分の部署と関連性がないと思われるような異業種の研究会に出張は認められないであろうが、JIEP主催なら平気でしょう。また、会員増への一助となるかもしれない。

このようなことを書いていると、会社のかたがたから大学教員はつかえないんだからあつという声が聞こえてきそうだが、JIEPが日本の産学官連携のイニシアティブをとれる学会になれるように何かをしたい。